

輓近に於ける禪學界の展望

增 永 靈 凤

〔一〕

凡そ宗教の發達は異質文化の接觸、社會情勢の變化、道德觀念の向上、科學思想の進歩等によつて促進されるであらう。ここに所謂發達とは連續しながらその價値内容を増加する現象に外ならない。勿論宗教の第一義性は時代や場所を超越して永遠に生くるであらう。然しながらそれが具體化したる客觀性は時代や場所の制約を斷えず受けねばならない。佛教の長い歴史的展開は教祖釋尊の眞精神を特定の時代や場所に生かさんとする努力の跡である。

さて佛教一般の展望は他日を期し、今は輓近に於ける禪學界の動向に關ししばらく卑見を述べることとす

る。禪が印度に興り、支那に榮え日本に實を結んだ歴史的過程を顧るに、その持つ本質的力がよく新時代を作ると共に他面時代の斷えざる影響を受けざるを得なかつた。近くは我が禪學界も亦急激なる時代の轉換によつて動かさつあることは否定し得ないであらう。特に戰時に於ては所謂さむらの宗教たる禪の教ふる實踐が一般人士の關心を集めてゐることは明かな事實である。ある意味に於て現代は禪の黃金時代とも言ふべきであらう。然しこの得意の時代ほど又危險な時期はない。かくの如くにして識者の關心は漸次學界にも浸潤して來てゐる。よつて我々は今三つの角度よりこれが論究を進めたいと思ふ。先づ禪宗史の研究を擧げてその動向を窺ふこととす

る。禪宗史特に支那禪宗史の研究が昨今頗る活潑を加へて來たのには蓋し當然の理由が存する。

う。

元來景德傳燈錄、祖堂集その他の所謂燈史類に基く初期禪宗史の研究は敦煌に於ける禪籍諸文献の出土によつて全く再検討をしての出版は斯學の研究にも少なからざる學的意義を有する。特に師資相承の問題を論究するに重要な寶林傳は青蓮寺本を補つて唯七、九、十の三卷を闕くのみとなつた。學者は是等の新しき資料を他の比較的公平なる高僧傳の記事に照合し、更に全唐文、金石粹編乃至支那に於ける佛教以外の正史雜史等の記事によつて確めるならば、所謂歴史の名に價する禪宗史が編纂されるであらう。而して支那禪宗史上の諸問題は達摩西來以後より五家分派までの間に伏在するやうに思ふ。輓近この方面的研究は日に盛んとなり、著述や論文に有益なる學的勞作を見るに至つた。

第二に道元禪師の述作特に正法眼藏の研究が一般に行はれて來たことは注目に價する。かかる現象は發生すべき幾多の原因を持つてゐるが、就中自國文化の反省と自

主的學問の樹立とに出發してゐることは否み難いであら

う。故に自己の學問的視點よりその研究を深めることは決

當來日本哲學の樹立は若き世界的日本に荷負された生きた問題である。而してその哲學は一般に絶對的普遍の全體と相對的特殊の個體との一多相即的なる對立的統一を媒介するに歴史的社會的現實の辨證法的實踐であらねばならないと言はれてゐる。勿論民族的特殊性を以て學的認識の普遍を抑壓するが如きは、徒らにその文化内容を萎縮せしめ將來の世界的進出を不可能ならしめるであらう。然し西歐の哲學思想を容れて而もそれを超え、以てかの行き詰りを開き、現實の歴史的展開に方向を示し得るものを見出ることが出来るならば、我々はそれを採つて新しき看點より哲學的意味を加ふべきであらう。而して一般學界に於てはかかる思想を道元禪師の述作に見出し、種々なる角度よりその勞作が發表さるに至つた。勿論かくの如き研究が道元禪師の眞精神をそのまま傳へてゐるか否かは問題であるが然しかかる偉大なる思想家宗教家の全貌は容易に捉へ得るものではない。

して徒事ではなく却つて學界を裨益するものと信ずる。

第三に右の二項と内面的に關係しつつも、表面それとは別に禪一般が取り擧げられ、その本質構造は固より、文化財への影響、人間修練の實踐的示唆乃至その心理的過程等の論究が行はるるに至つた。かかる研究の勃興が時代の要求に基いてゐることは無視出来ないであらう。而してその研究には理論と實踐との二面が存し、時代的にも可成り興味深き内容を包藏してゐる。然し今は主として上の二項を問題としよう。

〔二〕

禪學界輓近の三方向に就ての述作並びに論文は相當多數に上つてゐるが、先づ初期禪宗史の研究に於て學界に多大の示唆を與へた述作は鈴木大拙博士の「校刊少室逸書及解説」の附錄たる「達摩の禪法と思想及其他」並びに宇井伯壽博士の印度哲學研究第九卷「禪宗史研究」であらう。鈴木博士はこの書の緒言に於て從來の學者が道宣の續高僧傳中に存する達摩傳を最古のものとしてこれに無上の權威を附せんとする態度を難じ更に尊重すべき他の諸文献を擧げてこれが研究の材料に資すべきことを說かれてゐる。

第二段では禪宗の初祖としての達摩の特色ある禪法を示し、楞伽系と般若系との對抗を附説せられてゐる。而して大乘安心之法に入り「安心者壁觀」の提言を縱横に論究された。博士は壁觀が守一と看話の二面を持ち、後者の動態禪に安心が初めて確立すると主張せられてゐる。第三段に於ては達摩の禪が慧能頃に至るまでに如何なる發展の道程を辿つてゐるかを示されてゐる。而して博士は初期禪宗の特色を思想的方面と實踐的方面とに大別し、前者を宗教的には即心是佛、心理的には無心、無念、無憶、實在論的には無相、認識論的には般若の智慧となし後、者を不由文字言句、罪福俱遣、順物、不著の四項に分類せられた。更に清淨禪は默照禪の前身であり、般若禪は看話禪の先驅をなすと論斷せられてゐる。般若を重んじ頓悟を宗とし從つて語言文字を斥けた結果が禪門の二潮流となつてその歴史を一貫する。その一は臨濟の喝、德山の棒となり、又看話禪の傾向を強からしめ、他の一は學問を疎んじ、看經講教といふ方面に對して沒交渉の態度をとるに至つたと結論されてゐる。上の如き論究には幾分不透明な點や誤謬もないではないが、然し燉煌の新資料を活用してその斷案を導き出されたことは注目に値す

る。又學界にかかる新しき文献を提供してその學的水準を高められた功は永く沒し難いであらう。さりながら博士の論斷には見性や看話の先入見が隨處に現はれて初期禪宗史の研究には稍々行き過ぎの感を抱かしめる。

次に宇井博士はここ二三年中、禪宗史に關し先人未踏の論文を陸續として學界に提示せられた。我々はその成果を宗教研究、佛教研究、日華佛教研究會年報日本佛教學協會年報等に見ることが出来る。然るに昨年十二月是等を修正し是に新しき論文を加へて禪宗史研究として公刊せられた。本書は第一達摩と慧可及その諸弟子、第二牛頭法融とその傳統、第三五祖弘忍の法嗣、第四五祖門下の念佛禪、第五荷澤宗の盛衰、第六北宗禪の人々と教說、第七馬祖道一と石頭希遷第八北宗殘簡とより成つてゐる。就中從來未發表なりしものは第一、第五、第七、

第八の四篇である。思ふに本書は初期禪宗史研究に一つの大きな礎石を投じた感が存する。蓋し博士は燉煌出土の文献を初め最近學界に發表された新材料に基き、且つ全唐文金石粹編等を參照し、禪宗關係以外の佛教資料等によつて各事項を確め極めて正鵠を得た判断を下されてゐるからである。達摩の傳等に於ても從來の研究の及ば

ざる新見地を開拓された。先づ續高僧傳の基ける資料として曇林の略辨大乘入道四行序、楊衒之の洛陽伽藍記その他を擧げ、その南越到着を略ぼ四七〇年頃とし北魏來遊を四七五年頃と推定し、示寂を五二四年頃と斷定せられてゐる。又梁の武帝との面謁の如き傳説を批判し、かかる説話の起原をも明かにされた。更に達摩の用ひたる經典を推定して金剛三昧經維摩經楞伽經等を擧げられてゐる。

續高僧傳に傳へなかつた慧可の斷臂を楞伽師資記、傳法寶紀等によつて立證し、二祖の思想を少室逸書中より拾ひ、二入四行説の徹底やその積極的表現にありと斷定せられた。又從來屢々抹殺の危難に遭つた僧璨の存在を諸種の資料に基いて論證し、その誦出と傳へらるる信心銘の本領を至道無難唯嫌揀擇の二句にありとし、華嚴思想の存在を重要視せられた。而して最後に禪の行じ方やその見方が道信弘忍の時代に至つて全く實際生活に即したものとなり支那的に一大變化を生じたと論斷されてゐる。かかることは從來殆んど注意されなかつたが支那禪宗史を研究する上にこの推定は甚だ重大なる意義を持つものである。牛頭法融と其傳統に於て博士は續高僧傳が

道信との關係を述べざるに對し、全唐文乃至宗密の述作等によつて道信の印可を認め、更に三論の巨匠僧吳との關係を明かにし、法融の著述として絶觀論、心銘を擧ぐる等幾多の卓見を發表されてゐる。五祖弘忍の法嗣に於て博士は楞伽師資記に引用せられてゐる玄蹟の楞伽人法志、曆代法寶記、圓覺經大疏鈔、禪門師資承襲圖、傳燈錄等によつて五祖の弟子を數へその主なる十五人の傳を掲げられてゐる。五祖門下の念佛禪に於て博士は弘忍の門下並びに門下の系統中念佛禪に關係ある法持、智詵、處寂、無相、南嶽承遠、無住、淨衆寺神會、宣什等を擧げてその念佛の特色を究め、禪と念佛との結合する理由を説かれてゐる。尙ほ禪系統の方面から五會法師法照を見られた點は注意すべきである。荷澤宗の盛衰に於て博士は新資料に基いて先づ神會が慧能門下として、慧能を禪宗正統の第六祖となす目的で、神秀系統に對して、師承是傍、法門是漸の標幟を掲げ以て北宗排撃をなした顛末を明かにし、更に神會の弟子、孫弟子、曾孫弟子、玄孫弟子、來孫弟子等を丹念に調べ擧げられてゐる。尙ほ神會の北宗排撃に對する言動を考察し、道德上より下された論難は師資の證契即通を生命とする禪門としては特

に注目に價する。北宗禪の人々と教説に於て博士は從來の學者が一般に南宗禪を卓上した結果、却つて北宗禪の研究を等閑に附し、或は不當なる取扱ひをして顧みなかつた研究上の疎漏を指摘し、あらゆる文献によつて神秀及びその弟子、孫弟子、曾孫弟子等の傳を明かにせられた。更に北宗禪を以て漸のみと斷ずることの當らざる所以を説き、五方便を以て北宗禪の著しき特色と見られたことは卓見である。馬祖道一と石頭希遷に於て博士は南宗禪を事實上隆盛ならしめたる馬祖と石頭の傳並にそれが興隆の基礎を與へたる南嶽、青原の傳を究め更に其等四人に於ける禪の特色を擧げ、教家の立場と比較して支那禪の本質構造を明かにせられた。北宗殘篇は從來明瞭を缺ける北宗の傳統並びにその教説を究むるに多大の便宜を與ふる新資料の蒐集である。その解説に於て注目べきは觀心論の著者に就て下された論斷である。この問題に關しては從來種々の異論が存するが、慧琳の一切經音義に特に大通神秀作とある文献に基いて神秀撰と見られた。鈴木博士の所論と比較すれば蓋し興味ある問題であらう。我々は本書によつて禪宗史上幾多の新説と卓見とを公けにせられた博士によつて支那禪宗史の大成さるる

日を待望してやまない。この方面のものとしては現今忽滑谷博士の禪學思想史上上下二巻以外に纏つた述作を見出しえない。而もこの書は現今の學界より言へば修正を要する點が決して少くないからである。印度學は固より支那佛教史全般に十分の見通しを有せらるる宇井博士の如き碩學にして初めて眞に學問的なる禪宗史が完成されるであらう。

禪宗史關係の述作としてはその他胡適氏の「支那禪學の變遷」（今關天彭氏譯）矢吹博士の「鳴沙餘韻」中の禪籍解題、衛藤教授の「禪の思想」等が存するが、何れも斯學研究には一讀を要する、尙ほ昭和十四年五月發刊の「禪の書」中に於ける鈴木博士の六祖壇經なる論文は異本の比較研究をする今日参考すべき勞作であると言はねばならない。久野花隆氏は燐煌出土の文献に基いて最初初期禪宗史の問題を究明されてゐるが、宗教研究新第十四卷第一號所載の「流動性に富む唐代の禪宗典籍」、季刊宗教研究第一年第一號所載の「楞伽禪書」、^釋宗教研究第三卷第六號所載の「牛頭法融に及ぼせる三論の影響」等の諸論文はかかる新資料による研究であつて何れも参考に値する。古田定欽氏の佛教研究第三卷第六號所載の

「嶺南羅浮山の佛教」も興味ある勞作である。尙ほ木村靜雄氏の禪學研究第三十一號の「古清規考」は百丈清規の存在を疑へるものであるが、清規研究上一讀を要するであらう。日本禪宗の歴史的研究としては林岱雲氏の「日本禪宗史」が存する。

本書は鎌倉期以前の禪の渡來、鎌倉初期（立宗期）、鎌倉中期（宗勢伸張期）、鎌倉末期（守勢期）、禪僧と密教との關係の五章に分ち、鎌倉百五十餘年間に於ける禪宗の動向を示してゐる。我々は更にその後に於ける歴史的展開に就ての述作の出でんことを望んでやまない。

〔三〕

次に道元禪師特に正法眼藏の研究に關して一言しよう。宗門以外の人にして道元禪師の思想に關心を有する學究は少くないが、その學的勞作を發表して識者に多大の感銘を與へたのは和辻哲郎博士、秋山範二教授、田邊元博士、橋田邦彦博士等であらう。和辻博士の「沙門道元」はもと雑誌新小説及び思想に發表されたものであるが、大正十五年發刊の日本精神史研究に收錄されてゐる。これは一般にヘーゲル的な辨證法の原理を以て道元禪師の思想を解釋したものといはれ、後の道元研究に少

ながらざる影響を及ぼした述作である。秋山教授の「道元の研究」は昭和十年に發刊せられ道元禪師研究の單獨なる著作として質量共に優れたる學的價値を有する。この書は一般に西田哲學風の立場より禪師の思想を捉へたものといはれてゐる。田邊博士の「正法眼藏哲學私觀」は博士の所謂絕對媒介の現實哲學を以て禪師の思想を把へて縱横に論究されてゐる。本書は昭和十三年十月哲學研究第二百七十一號に掲載せられたる「永平正法眼藏の哲學」及び同年七月文部省で開かれた夏期哲學會に於ける特別講演「日本哲學の先蹟」等を補訂せられたるものである。この書の内容はこれを分つて六章とする。その第一、日本思想の傳統と個性發揮との綜合として成立すべき理由のは傳統承受と個性發揮との綜合として成立すべき理由を示し、強調にして包容性に富める日本精神は既に儒學や佛教を攝取して是等を同化し來つたが、更に西歐の理論的科學思想を容れ、哲學をして傳統の方角附けを行はしめ、以て人類的な日本哲學を將來に建設すべきであると說かれてゐる。第二日本哲學の先蹟道元の正法眼藏に於て博士は自ら傳統と個性との綜合を完全に成し遂げた先蹟を道元の正法眼藏に發見するとなし、その場合問

題となる宗教と哲學との領域を絕對と相對との關係異同によつて解決し、眼藏の道得を媒介として道元禪師の宗教が哲學と相即する所以を明かにせられた。第三道得の絕對媒介性に於て博士は道元禪師の說不得底を道得し、道得を介して道得を否定し、不思量底を思量し、思量によつて思量を越ゆる獨自の立場を博士の所謂絕對媒介の辨證法を以て解し、且つその辨證法は論理と非論理との對立を認めつつ、それらを綜合統一する論理であり、而もその絕對否定の轉換は行爲に現成するものなることを說かれてゐる。第四絕對の歴史性に於て博士は禪師の所謂佛向上事が溯源即發展なる無限の動的渦旋である限り相對の歴史的發展の媒介を容れる立場であり、又佛向上事をかく解するにより一佛の内容に於て本來清淨と無限淨化との相即を認むこととなるから、倫理的實踐の媒介を積極的に含む可能性を有すると說かれてゐる。第五、時の經歷に於て博士は道元禪師の深信因果や有時の經歷等の說によつて禪師の宗教が倫理と歴史とに媒介せられ得る側面を積極的に有する所以を明かにし、而もその立場が非連續的有時と連續的經歷との相即を飽くまで不可分離の媒介に於て行するにあることを說かれてゐ

る。第六、絶對現實の立場に於て道元禪師の佛法が歴史的發展、倫理的實踐への媒介を多分に含んでゐることを見られた博士はまた世法即佛法、佛法即世法の絶對現實論が禪師の立場なることを如何なる直接態をも許さぬ絕對媒介の論理によつて證明し、更にそれに國家現實への具體化を容れ得る可能性の存する所以を強調せられてゐる。本書は小冊子にも拘らず從來の學者の未だ言はざる點を道破し、且つこれを徹底された。その日本哲學の樹立に對する公平なる態度、佛教に關する正しき理解、絕對媒介の論理による眼藏哲學的確なる把捉傳法相承に對する深き領解禪師の時間論に試みられた卓見等幾多學界を稗益するに足る内容を有する。若し望蜀することが許されるならば道元禪師の宗教的領域の檢討、曹洞禪に於ける公案の地位乃至今日の哲學的思素を生かす歴史的事實の闡明を必要としよう。

次に最近發行された橋田博士の「正法眼藏釋意」第一卷に就て卑見を述べて見たい。橋田博士は周知の如く多年正法眼藏の研究に手を染めらる篤學の士である。その著書又は雑誌に發表された斯學の成果も亦少くない。本書は正法眼藏解說、道元禪師小傳、正法眼藏現成公案

現成公案、釋意の四篇より成つてゐる。第一篇正法眼藏の解說に於て博士は眼藏の成り立ちを究めて、七十五卷本の價値を卓上し、あらゆる註釋書や解說書を擧げて是等を批判し、更に道元禪師の傳記を列ねてその内容を紹介し、最後に私觀として行の書たる眼藏を宗門外に解放して自由に味得し、而も道の上よりその文字を見る必要を説かれてゐる。私觀を除く他の四項は曾て雜誌道元に發表されたものであるが、平明なる表現の中に正法眼藏の内包と外延とを示し單に初心者のみならず研究者も稗益すること頗る大なるものが存する。第二篇道元禪師小傳は波瀾少なからざる禪師五十四年の生涯に於ける重要事項が平易なる叙述の下に述べられ、そのたゆみなき精進の中に磨き出された高潔なる人格を偲ぶに十分なる内容を持つてゐる。末尾には簡単ながら年表が附されて讀者の理解を助ける點が少くない。但しこの一篇は純歴史的に書かれたものでないから禪宗史家より見れば多少の問題もあらう。然し他面興味深き推定も隨處に見出される。玄明の破門を單なる名利排撃とのみ見ることなくその裏に鎌倉在留の間に於ける事情の何ものなりしやを窺はんとするが如きその一例であらう。第三篇正法眼藏

現成公案は句讀を附し科段が切られてゐるから極めて読み易き感を與へてゐる。第四篇現成公案釋意に於て博士

は七十五帖本の第一に存し、且つ内容的に最も整へる現成公案を捉へて先づその題目の意味を明かにし科段に従つて體験の世界、體験の仕方、（修證）觀としての修證、行としての修證、（證佛）我の脱落、體験の體驗的把握等に分つて論じ最後に禪師の述作中より現成公案の語を拾つて解説し全體を總括されてゐる。博士は身心を擧して會取する底の體験即ち行の構造を縦横に解剖し、生命活動の眞相を徹見せられた。その解釋は眼藏の傳統的立場からは種々批評されるであらうが、然し流石に二十餘年來專心研究されてゐるだけにその斷案は正鵠を得てゐると思ふ。博士が眼藏の參究によつて宗教の全方面的立場に即して科學研究を行ふ意義を深め、體験に没入して眞に生命の流れに觸れられてゐる點は世の一般科學者とは全く類を異にする。然し科學的立場に於ける體験乃至生命と眼藏に於ける其等との關係異同に就ては更に論究の必要がないであらうか。その飛躍による間隙を満すものは文化科學特に哲學であらねばならない。現代の哲學が單なる概念的把握のみに終るものでないことは

いふまでもないであらう。

尙ほ正法眼藏の成立、傳承、講究、内容の一般等に就ては前述の「禪の書」中に存する宇井博士及び柴田學士の「正法眼藏」なる論文に述べられてゐるから参照すべきであらう。紀平正美博士は日本精神叢書第三十卷に「道元と日本の禪」を説かれてゐるが、學問的にはさほど重要なものではない。道元禪師に關する從來の研究は主として内包的に行はれて來たが、然しこれのみでは十分なる成果を期待し得ない。かかる自覺の下に先づ外延的にその研究を進めたものは伊藤慶道氏の「道元禪師研究」第一卷である。

本書は全篇七論文より成つてゐるが、天童如淨禪師に關する初めの三論文は特に注目すべきであらう。青年佛教叢書中の中根環堂氏著「道元禪師の生涯と其宗教」も平明なる叙述の中によく禪師の人格が描かれてゐる。かくの如くして道元禪師の研究は一般學界の關心を集め昨年九月には雑誌理想が「道元の哲學」を特輯した。秋山範二氏の「道元の哲學と實踐」圭室諦成氏の「日本佛教における道元の地位」鏡島元隆氏の「正法眼藏の精神」等は一讀するの價値が存する。眼藏の特色ある論式に就

ては渡邊模雄氏が宗教研究第二年第一輯に「正法眼藏の論式に關する一歴史觀なる論文を發表された。眼藏の徹底的研究がその背景たる佛教思想の究明に俟つべきことは言ふまでもない。この論文はかかる方面を開拓したもののとして注意すべきである。その他斯學に關する著書論文は予が前記の理想特輯號に列舉して置いたから今は省略する。道元禪師研究を一般化しつつあるものとしては岩波文庫本正法眼藏（衛藤即應氏校訂）道元禪師語錄（大久保道舟氏校正）出版の功を認めねばならないであらう。

〔四〕

最後に前の二項に屬せざる禪の研究を一瞥することとする。春陽堂發行の禪の講座は禪の大衆化を目的としたもので、稍々通俗の嫌ひは存するが注目すべき論文も少くない。中に就て禪の書中伊藤古鑑氏の「禪籍概論」、石井光雄氏の禪と典籍は禪學研究を志すものには参考となるであらう。禪の本質構造に就て論究した勞作は昨今餘り見出し難い。但し久松眞一氏の「東洋的無」なる著書の中にはかかる論稿が少くない。本書は前篇と後篇とを合せて十六の論文より成つてゐるが、前篇中の「禪」「禪

藝術の理解」「聖の否定としての禪」「禪の辨證」「眞佛の所在」「プロテイノス」等の論文は讀者の興味をそそるであらう。又哲學研究第二百八十八號所載坂田吉雄氏の「禪の構造と鎌倉武士」哲學雜誌第六百三十六號所載山口等澍氏の「坐禪の哲學的意味」古典研究第三卷第十號所載三木誠氏の「禪宗の眞髓」歴史公論第八卷第三號所載藤井喜一氏の「男性的宗教としての禪」等は注意を引く論文であるが、必らずしも全般的に肯定し得ざるものも存する。禪と文化の問題に就ては和辻博士の「續日本精神史研究」筑土鈴寛氏の「宗教文學」等にも關係論文が存する。日華佛教研究會年報第三年所載大久保道舟氏の「日本禪の特質とその文化への影響」は禪が日本文化の各層に滲透した史實を可及的に擧げた論文として學問的意義がある。禪と武士道との關係に就ては鷺尾順敬博士の「鎌倉武士と禪」を初めとして種々に論ぜられてゐるが、理想第七十五號所載古川確悟氏の「禪と武士道」禪學研究第三十二號所載木村靜雄氏の「武士道と禪」日本佛教學協會年報第九年所載大久保道舟氏の「中世の禪僧と國家意識」古典研究第三卷第十一號所載西義雄氏の「澤庵の劍禪一致の精神と其の活用性」等の諸論文

は一讀するの價値があらう。是等禪の諸問題に就ては禪の講座中の「禪と文化」理想第七十五號「禪の研究」禪學研究第三十二號「興禪護國」等を見るべきである。又禪が一般心理學者の研究對象となつてゐることは注意を要する。この方面的先覺者は元良博士であつて博士は曾て羅馬に開かれた國際心理學會第五回大會の席上「禪的心理學的問題」に就て講演されてゐる。入谷智定氏にも「禪的心理學的研究」なる著書が存する。「勘の研究」を公刊された黒田亮士もその著述中臨濟錄や傳心法要に基いて研究をすすめられてゐる。禪の書中には同博士の「禪の心理學」なる論文がある。更に佐久間鼎博士は九州帝大法文學部十周年記念哲學・史學・文學論文集に於て「默照體驗の意義」なる論文を發表されてゐる。本論文は序説を除き修定の行法體驗の風光、心理學的考察機能的意義の四章より成つてゐる。序説に於ては體驗一般がその私事性の故に的確なる傳達の可能性を失ひ易いが、然し同一事態に於ける相似性は必ずしもその表現と理解とを不可能ならしめない理を説き、默照體驗は正覺の默照銘に基くけれども宗派的に看詰禪に對立するが如き狹き内容を指すのでなく、この種體驗一般に就ての論究

なることを明かにされてゐる。修定の行法の章では現存の資料に基いて奥義書や瑜伽經等の調息制感調身坐法觀心特に瑜伽の八支を示し一部小乘禪經や達摩等の禪法に説き及んでゐる。而して是等を心理的な意味で「刺戟ぬき」reizfrei、「構へなし」einstellungsfrei の二つで統一された。體驗の風光の章では達摩の壁觀二入説を初め慧可、僧璨、慧能等の禪風を明かにし、禪門の體驗内容の特色を挙げ、瑜伽の行法や基督教神秘家の經驗と區別せられてゐる。即ち禪門は神通や神秘を重んすることなく、又沒理性的にあらずして健全理性的であり、教觀的辭句を弄せずして日常生活の用語即ち白話を用ひても更生の心地に基いて日々是好日の生活を楽しむ所に意義ありとする。體驗の風光はかくして人格に具現し佛法の生活化が存すると説かれる。心理學的考察の章では禪家に屢々用ゐる麻三斤、庭前柏樹子、狗子無佛性の話は最も直接的にして端的な體驗の事實を示さんがための手段であるがその體驗の境地科學的考察の圈内に齎らし發生の條件を探りその心的機能を明かにすべきであるとし、佛教心理學の取るべき思想系統を示されてゐる。而して坐禪中眼微かに開き、鼻息微かに通じ坐禪に靜處を選ぶ

ことの心理學的考察を試みられる。最後の機能的意義の章では體験への味到の方途としては種々存するが就中瑜伽行法から傳承し來れる坐禪法が最も適切であるとなし、これを外的條件即ち環境事態の兩方面と內的條件とは體系條件とに分つて考察されてゐる。即ち靜室の採光、氣候の狀態より調身、調息乃至制感、調心等に關し生理心理的なる觀點から種々論究する。而して内外條件設定の目標を(一)心理生理的な最適度狀態に安住すること(二)心緣を放下して大休大歇することに置くのである。更にこれに連關して論理的對立を克服せる場合の無心や頓悟成佛の意義乃至禪の日常生活化等に就て諸種の考察を試みられてゐる。博士の默照體驗の意義に關する論文の内容は略ぼ上の如くであるが、この研究の心理學や禪の學問的取扱ひに對する貢獻は決して少くないであらう。殊に禪の立場より見て甚だしき過誤はないやうに思ふ。その長所としては禪を從來の學者の如く神祕的となさずこれを健全理性的となし實際生活化にその本領を見出し、修定を苦行と混同せず、坐禪に於ける環境事態の外的條件に就ての心理的考察を審かにしその內的條件に關する専門的觀察を明かにせるが如きこれである。然

しながら古代瑜伽の禪法と禪宗のそれと同列に見坐禪の外的條件には諸清規を參照すべきであるが、この方面に就ての論究が缺け、その內的條件には諸種の坐禪儀の參考を必要とするが、その關心に乏しく禪坐や公案も一考を要するものであるが十分に果されてゐないことなどはその短所ではなからうか。本論文に連關して注意すべきものは鈴木博士の禪と念佛の心理學的基礎であらう。本書は前後二篇よりなり前篇は「知識を超えたる經驗」より「工夫的精神の意義と機能」に至る十二章、後篇は「看話の工夫と念佛」より「公案及び念佛に關する白隱の見解に至る八章を含んでゐる。附錄としては禪經驗の諸形相十八項が擧げられてゐる。本書より我々は禪の歴史的展開、その心理的過程宗教的意義乃至禪と念佛との共通點等に關して種々なる示唆を受けることが出来る。然し禪の研究は看話や見性の問題を外にしては到底不可能であるといふ博士の持論が全篇を通じて隨處に見出される。信念としては勿論尊重すべきであるが、學問的な立場からすればかかる先入見は往々にして獨斷的な結論に到達する恐れがないではない。

以上禪に關する著述や論文に就て簡単ながら展望を試

みたのであるが、然しその内容の紹介や批判は予の學的認識の不足より著者の思想を誤解し、或はその卓見を看過したところが存するかも知れない。この點著者を初め一般讀者の寛恕を請ひたいと思ふ。又ここに掲げざる名論卓說も他に多數存することであらうが、紙幅の關係上其等の指摘をも、省略した、最後に將來研究さるべき新

方向について一言したい。支那禪宗史の研究は新しき資料による學問的成果を基礎として初期禪宗一般の思想的動向を検討し、進んで宋代に及び、燈史類の史的價値を批判し、宋儒との思想的交渉等を再吟味すべきであらう。日本禪宗史は鎌倉時代より降つて禪宗の時代的變遷特に徳川時代の動向を他の思想史と連關して検討するの要がある。正法眼藏の研究は宗外の學者によつて多大の成果が擧げられ來つたが、今後は其等の人々によつて究め難き宗教的領域の開拓が要求されるであらう。その他禪の本質構造を検討してその文化的宗教的意義内容を明瞭にし禪の時代に生くる根本的力を究明すべきである。

禪は正しく東洋思潮の底を貫く流であり、その文化は東亞獨自の文化體系である。禪の學問的分野は益々擴大されつつあると共に其の實際的部門も時代の要求する對象

となつてゐる。新進學徒の斯道開拓を要望して一先づ本稿を擋筆することにしよう（一五・一・二一九）